

第3回 日本ジオパーク委員会議事録 (案)

日時: 2008年10月20日(月) 13:30~17:00

場所: 経済産業省・別館10階 1020号会議室

出席者: (敬称略)

委員長

尾池和夫 国際高等研究所フェロー(京都大学 前総長)

副委員長

町田 洋 日本第四紀学会(東京都立大学名誉教授)

委員 (五十音順)

伊藤和明 NPO 法人 防災情報機構 会長(元 NHK 解説員)

加藤碩一 産業技術総合研究所地質調査総合センター 代表

鹿野久男 (財)国立公園協会 理事長

瀬古一郎 (社)全国地質調査業協会連合会 会長

高木秀雄 日本地質学会(早稲田大学教授)

中川和之 日本地震学会(時事通信)

中田節也 日本火山学会(東京大学地震研究所教授)

オブザーバ

外務省広報文化交流部国際文化協力室 室長	安東義雄
外務省広報文化交流部国際文化協力室 課長補佐	渡邊 博
外務省広報文化交流部国際文化協力室 事務官	濱田 幸
文部科学省国際統括官付 国際統括官補佐	清水宣彦
文部科学省国際統括官付 ユネスコ第3係長	日俣詠里子
文化庁文化財部記念物課 主任文化財調査官	桂 雄三
農林水産省農村振興局企画部資源課土地保全係長	菊池茂史
経済産業省知的基盤課 課長	渡邊重信
経済産業省知的基盤課 課長補佐	永田邦博
国土交通省総合政策局観光資源課	平松大介
国土交通省観光庁観光地域振興部観光資源課	松岡 良
環境省自然環境局国立公園課	岡島一徳

事務局

産業技術総合研究所	渡辺真人
産業技術総合研究所	牧野雅彦
産業技術総合研究所	吉川敏之
産業技術総合研究所	原 英俊
産業技術総合研究所	玉生志郎

日本ジオパーク候補申請地域

アポイ岳 3名

様似町・坂下一幸町長、水野洋一社会教育課長、原田卓見社会教育係長

南アルプス 5名

伊那市・白鳥孝副市長、大鹿村中央構造線博物館・河本和朗学芸員、
伊那市総務部政策推進課・酒井高太郎主任、伊那市行政改革推進室 稲葉治美

プレス 11名

フジテレビ、新日本海新聞、神戸新聞、北海道新聞、朝日新聞、日本海テレビ、西日本新聞、
高知新聞、山陰中央新聞社、読売新聞、共同通信

[はじめに]

事務局(牧野)から委員出欠状況の紹介と、資料確認(委員会配付資料、地域からの配付資料からなる)、鳥取県のオブザーバ参加の連絡を行った。

1. 委員長挨拶

時間の関係で省略。

[報告]

1. 第2回日本ジオパーク委員会議事録確認

「第2回日本ジオパーク委員会議事録(資料1)」について、本委員会中に意見がなければ承認とすることになった。

委員会終了までに特段の意見はなく、承認された。

2. 世界ジオパーク候補地域の視察報告

第2回委員会以降に行われた現地視察について、参加した委員から報告が行われた。

1) 洞爺湖・有珠山(伊藤委員)

a. 概要

- ・ 北海道有数の観光地であると同時に、噴火の危険とも隣り合わせの場所でもある。
- ・ 活火山と人間活動の共生がテーマ。20世紀以降4回の噴火を経験している。それぞれにフットパスや観光名所があり、生きている地球の息吹に触れることが可能。
- ・ 2000年噴火の後、エコミュージアム運動が盛んになり、情報集約、ガイドの養成、教育活動など、自然教育の原点ともいえる活動に取り組んできた。
- ・ 科学者と行政・住民の連携が実現している。
- ・ 自治体ごとの温度差があり、これを埋めることが課題。2008年サミットを契機に解消しつつあるらしいが、まだ十分ではない。
- ・ 7000～8000年前の山体崩壊、駒ヶ岳山体崩壊時の津波の影響を示すジオサイト整備が不十分。
- ・ 全体の印象として、組織がしっかりしている。科学者のバックアップが十分得られている。

b. 質疑

- ・ 西山火口については、大型バスは近くまでは入れるが、看板の間違い(正確には西山山麓火口群)等、まだ整備が必要などところはある。
- ・ ハザードマップも、地域には浸透していると考えられる。
- ・ 防災を強調することが、世界ジオパークネットワーク(GGN)に申請したときに有利になるかどうかは考える必要がある。

2) 糸魚川(加藤委員)

a. 概要

- ・ ジオパークの趣旨は、よく理解されている。
- ・ 看板の記述は中・高生には難しい印象があり、英語の充実も課題だが、既に準備中とのことであった。
- ・ ジオパークの説明も欲しい。フォッサマグナミュージアムでは1室、専用の展示室を設けている。
- ・ 有料ガイドを準備しようとしている。

- ・ 柵口地滑り、根知断層露頭、ひすい峡等、すぐれたジオサイトが多数ある。
- ・ 地域の期待感は感じられた。学芸員の寄与も高い。
- ・ 地域特有のジオパークグッズはこれから。
- ・ 外国人観光客対策も必要。
- ・ 町村合併の結果、地域としての一体性、意識の共有等よい影響があった。
- ・ 「ジオパーク」の中に「ジオパーク」がある2重構造は、解消する必要がある。
- ・ 一言で言えるような「売り」が必要(東西日本の会合地など?)。

b. 質疑

- ・ 看板も難しいものを直すことも必要だが、やさしくしすぎるのもまた問題。

3) 山陰海岸(高木委員)

a. 概要

- ・ 山陰海岸国立公園を基本とした東西に広い地域からなり、多くの天然記念物や地質百選を含む優れたなジオサイトがある。
- ・ 香住海岸(湖成層の上に動物足跡)、北丹後地震復興の歴史なども、もっと売り込んでよい。
- ・ 各自治体の温度差は解消されつつある印象である。
- ・ 各地での説明にはいくつか物足りないところもあった。
- ・ ジオツーリズム拠点の整備が不十分。
- ・ 拠点大学がない。最近の研究があまりない。研究者とのネットワーク作りをしたほうがよいのではないか。
- ・ テーマとしている日本列島誕生(日本海拡大にすべきか)をもっと統一してアピールしたほうが良い。
- ・ 地質学的なテーマをもう少しうまくまとめればもっと良くなる。

b. 質疑

- ・ 最新の研究に基づいた解説・説明が必要で、フルートキャストを連痕と説明していたりする例がある。現地の説明員等にも、最新の正しい知識を身につけてもらいたい。
- ・ 看板等にわかりにくいところがある(郷村断層など)。
- ・ 砂丘は人為的な地形ではないかという説もあり、かんな流しや伐採の影響など、人間との関係も説明に含めることを考えるべき。

4) 四国・室戸(中川委員)

a. 概要

- ・ 室戸の玄関口となる高知空港でも、ジオパーク関係の展示も考えるとよい。
- ・ 高知コアセンターも研究目的の施設ではあるが、ボーリングコアには過去の地震の記録があるという点では南海地震との関係はある。
- ・ 室戸までの道沿いに看板やジオサイトの整備がない。
- ・ ジオ遍路というアイデアも出ていた。あり得ない話ではない。
- ・ 説明板の整備があればよいジオサイトになる場所がある。一方で、説明板がないので、ガイド付きでないと良さがわからないのはもったいない。
- ・ エリアが四国全体ではわかりにくい。地元として必ずしもこだわりはなさそうな印象なので、室戸としての活動が盛んになるとおもしろい。

- ・ 大地には素質・資格がある一方、中心となる拠点がない。自然の家にスペースはある。
- b. 質疑
- ・ 南海地震に関して室戸の海岸段丘に対する説明がない。南海地震を語るにも時間軸がいろいろある。説明の仕方に工夫が必要であろう。
 - ・ ある港の深さで次の南海地震が決まっている。地元知られていない。
 - ・ 空港の活用に関して、ランカウイでは着陸する航空機の機内でアナウンスが入るという例もある。
 - ・ 室戸だけをエリアとすることも可能かと考えられるが、四国として予算をもらっていることを意識しているらしい。

5) 島原半島(町田委員)

a. 概要

- ・ 雲仙火山は地溝帯に噴出している珍しい火山の例と言え、1991年の噴火の後を中心に視察を行った。平成新山の活動跡や被災した小学校も含まれる。
- ・ 3つの市が密接に協力し、盛り立てている印象がある。
- ・ 施設が機能している。ハードはしっかりしている。
- ・ ソフト面の充実を急ぐべき。ガイド養成や、専門の学芸員雇用など、進展はある。
- ・ ジオサイトの説明が不足している。平易なものからより専門的なものまで整備されると良い。
- ・ 中心となるテーマとしては、人と火山の共生、歴史的にみた火山の影響などが考えられる。それには、「島原大変」の話をもっと前面に出してアピールするほうがよい。
- ・ 水無川扇状地に縄文遺跡があるが、説明に生かされていない。

b. 質疑

- ・ 地域住民の参加(島原普賢会)が実現している。6mのかさ上げ事業を成し遂げるなど、火山災害の復興のモデルでもある。
- ・ 世界初の火道掘削をもっとアピールしてはどうか。中国・韓国人向けの説明も必要である。
- ・ 「島原大変」の現象は、火山は成長するばかりではなく、崩れることもあるという証明もあるので、説明に加えた方がよい。

5カ所全体としての意見・印象等は特に出なかった。

[プレゼンテーション]

1. 日本ジオパーク候補地域からのプレゼンテーション(発表10分、質疑10分)

日本ジオパーク申請地域から、発表10分、質疑10分でプレゼンテーションが行われた。発表順は事前の抽選により、1)南アルプス、2)アポイ岳となった。

1) 南アルプス

a. 概要

- ・ エリアの中で、6カ所のジオサイトを設定している。これらで過去から現在までのプレート沈み込みに伴う現象が観察できる。

- ・ 運営組織として、民間団体、教育研究機関、行政が独自に活動しており、今後は連携を強める予定である。
- ・ 戸台化石資料館では 20 年に渡り、観察会を行っている。
- ・ ジオサイト整備に地域住民も参加しており、露頭の整備などを行っている。
- ・ 将来は南アルプス全体のエリアに広げる計画がある。

b. 質疑

- ・ 伊那谷をジオサイトとして検討いただきたい。地形と活構造(内陸盆地の形成)として重要なサイトである。また、中央構造線が動いていないのは伊那谷断層帯が動いているためなので、関係もある。
- ・ 伊那谷ジオパークから将来的には南アルプスに拡充する方が自然な成り行きではないか。
- ・ 自然遺産登録とジオパークの推進母体が一緒のようだが、ジオパークと世界遺産は別物として考えた方が良い。

2) アポイ岳

a. 概要

- ・ アポイ岳は高山植物群落として有名で、特別天然記念物や絶滅危惧種が数多くある。
- ・ かんらん岩は商品としても活用されている。
- ・ 様似町には大学はないが、全国の研究者が巡検・研究に訪問している。町民向けに講演会も開催しており、住民と研究者の交流がある。
- ・ 1997 年に研究者向け宿泊施設を建設したほか、隣接してアポイ山荘(ホテル)、ビジターセンターがある。
- ・ 3 つの国際会議(日韓構造地質研究会、国際レルゾライト会議、ODP ポストクルーズミーティング)の開催実績がある。これらには地元住民も参加している。
- ・ 高山植物盗掘事件をきっかけに、アポイ岳ファンクラブが結成され、官民一体の活動として自然再生の取り組みを続けている。
- ・ ジオパーク町民現地巡検も行い、今後、ジオツーリズムを推進していく。

b. 質疑

- ・ 砂白金も入れてはどうか。
- ・ 地学に疎い人にどのくらい親しみやすくできるかは課題である。看板等は今後3年間で整備する。花目的のビジターが中心なので、これらの方々に訴えかけるパンフ類を準備したい。
- ・ 植物の学芸員はいるが、地質のガイドは町民参加でまかなう予定である。
- ・ 深い(マントルの)岩石が地表にあることの説明は日高山脈の形成にともなうダイナミックな運動の結果として説明している。諸説あるものは一つの説に頼らないほうが良いし、ストーリーの多様性にもなる。いずれにせよ、どうしてそこにかんらん岩があるかをわかりやすく解説する必要がある。
- ・ ガイド(解説者)のための共通ガイドブックを作成する予定である。
- ・ 小学生の活動はアポイ基金の中の教育活動として行っている。

[休憩] (3:45 ~ 3:55)

休憩の間に、地域からの出席者およびプレス関係者は退席となった。また、委員の評価シ

ート採点が集計された。

[審議]

1. 世界ジオパーク候補地域の選定審査

冒頭、事前に欠席者からよせられていた意見が、事務局から紹介された。選定の前提として、仮に選定地域に火山地域が2箇所含まれることになった場合、世界ジオパークネットワーク(GGN)でどう判断されるかと懸念する意見が出された。また、中国では数多くのジオパークが登録されているが、GGNに落とされた事例はあるのかとの質問もあった。しかし、今回は外部の事情を伺うより、委員会で判断をすることになった。

「ジオパーク」として、ジオはいずれの地域も理解されているが、パークとしての整備には差があるとの認識が示された。特にツアーがしっかりしていないと困るのではとの意見もあった。

選定数を3カ所とするか、あえて減らすかについても議論となったが、最終的に3カ所にすることで合意された。

議論の結果、洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島をGGN加盟申請地域とすることに決した。山陰地域、四国(室戸)については、素質はあり、改善もされつつある印象なので、委員会としては世界に十分通用するジオパークに仕上がるのを待つこととした。看板の整備が不十分など、未完成ではあるが、地元の熱意は伝わるとの意見もあった。また、素質はあるのに宝の持ち腐れになっているとのコメントもあった。振り落とすための委員会ではないので、アドバイスは委員会からも積極的に言い、パークとして完成させてもらうことを確認した。

この他、記者レク資料の文章についても検討した。

2. 日本ジオパークの審査の目安について

最初に事務局案が説明された。認定基準についてはGGNに準じることとし、小規模なもの、発展途上なものも認めたいという趣旨が紹介された。その中で、価値あるジオサイトがあること、ジオパーク活用のための実現可能な計画があることなどが重視する点として挙げられた。これに対し、地球科学的な説明がなされていること、地元の熱意が認められること(例えば住民参加)も加えたいとの意見が出された。地域については、ジオサイトが集まったものがジオパークであり、ジオパークをまとめたもの、例えば「四国ジオパークネットワーク」は成り立つとの考えが示された。委員会としては「地元の熱意を大切に、場合によっては意見も言わせていただく」との方針が確認された。

なお、来年度は日本ジオパークに認定された地域から世界ジオパークネットワーク申請候補を選ぶことでよいか議論になったが、最終的には次回の委員会でさらに審議することになった。

[その他]

1. 次回以降(来年も含む)の予定確認

次回の委員会の日程を、12月8日の午後とすることとし、日本ジオパークを決めたいとの方針が示された。また、日本ジオパーク候補地域の現地視察は、アポイ岳について11月18~19日(小泉・中田委員)、南アルプスについて11月15~16日(尾池・中川委員)を候補として、地域と調整することになった。

来年の予定として、日本ジオパーク記念式典を2月20日、東大・小柴ホールで行う方向で準備中であるとの報告がなされた。

2. その他

GGN への申請書の提出は、地域から行ってもらい、委員会としては推薦書をつけることが確認された。また、9月に松浦事務局長との懇談の席で話題にとりあげられたユネスコロゴの使用については、現在検討中であることが報告された。

以上

[配布資料]

資料1 第2回日本ジオパーク委員会議事録(案)

資料2 現地視察報告の要約

資料3 評価シート